

# 解釈 - 翻訳 - 翻訳文体論 ? : カフカのテキスト Die Baume の日本語訳をめぐって

著者	西嶋 義憲
雑誌名	広島ドイツ文学 = Die Deutsche literatur
巻	8
ページ	45-61
発行年	1994-03-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/43647">http://hdl.handle.net/2297/43647</a>

－ カフカのテキスト *Die Bäume* の日本語訳をめぐって －

西嶋 義憲

0. はじめに

カフカのテキスト *Die Bäume* は、一般の読者向けに訳され出版される翻訳だけでなく、必ずしも専門家を対象にしている解説書・啓蒙書や雑誌、あるいはまたカフカ作品の専門的研究文献などの中にも引用され訳されることがある。入手できた範囲内に限定してそれらの訳を合計すると、20例にのぼる。

ところで、一般に、「文学作品」と呼ばれるテキストを翻訳する際には、解釈という問題がかかわってくる。「文学作品」は複数の解釈（読み）を許容することがあり、それを翻訳するにはテキストを語学的に正確に理解した上で、その複数の可能な解釈から一つの解釈を選択していることが前提になっているからである。もし解釈の違いが翻訳に反映されたとしたら、それはどのように、どの程度反映されうるのか、あるいは反映されるべきなのか。この問題を、複数の解釈を許容するカフカのテキスト *Die Bäume* を利用することにより考察してみたい。

1. 分析の枠組み

1.1. 分析の焦点と枠組み

まず、本稿で対象となるカフカのテキスト *Die Bäume* を引用しておく<sup>1)</sup>：

*Die Bäume*

Denn wir sind wie Baumstämme im Schnee. Scheinbar liegen sie glatt auf, und mit kleinem Anstoß sollte man sie wegschieben können. Nein, das kann man nicht, denn sie sind fest mit dem Boden verbunden. Aber sieh, sogar das ist nur scheinbar.

本稿ではとくに、「wir」と比較される「Baumstämme im Schnee」(=1)の状態の解釈に関わる部分に焦点をあてる。つまり、この表現によって指示される対象の状態の可能性を、

その述語によって提示される様態との関係で調べる。具体的には、"sie (= Baumstämme im Schnee)" を主語とする2つの述語の "[...] liegen sie glatt auf" (=2)) ; "[...] sie sind fest mit dem Boden verbunden" (=3)) である。

述語が2つ(1)/2)) があるので、それによって描かれる "Baumstämme im Schnee" の様態は、それぞれの述語が提示する世界の組み合わせから、論理的には少なくとも4つの可能性がありうる：①立木－立木；②立木－倒木；③倒木－立木；④倒木－倒木。さらに、⑤積極的にどちらの状態とも明言していないという解釈もありうる。ところが、以下で見るように、実際に提出されているのは、そのうち立木(=①)；倒木(=④)；パラドクス(=③)の3つの解釈である<sup>23</sup>。

### 1.2. 仮説設定

*Die Bäume* の訳文が現われるテキストは、それが予想する対象読者の違いにより、大きく次の3種類に分けられる：

[A-TYPE: 翻訳(日本語訳のみ)]：

一般読者を対象にして市販される翻訳。当然ながら、原文は付属していない：たとえば、『カフカ全集』など。

[B-TYPE: 非専門文献(メタテキスト+日本語訳)]：

必ずしも専門家を対象にしていない解説書・雑誌などに引用される翻訳。原文は基本的に挙げられていない：たとえば、『ユリイカ』、『カフカの解説』など。

[C-TYPE: 専門文献(メタテキスト+原文+日本語訳)]：

基本的にはドイツ文学研究者を対象にしている、あるいは予想している研究書あるいは論考に提示される便宜的な訳文。通常、原文は提示されている：たとえば、専門雑誌論文、紀要論文など。

たとえばドイツ語という同一言語内において、あるテキストの目標とする読者層が異なると、それに応じて表現法などに違いが起りうるということが知られている(vgl. Sandig: 1978)。これと同様の発想に基づき、訳文が現われるテキストを、予想される対象読者の違いによって3つのタイプに分類したが、この異なるコンテキスト(使用条件)の違い、換言すれば、翻訳テキスト理解の際の訳文へ依存度の違いが、訳文の表現あるいは文体に何らかの影響を与えている可能性があるかと予想することができる。

また、上記3タイプの訳文の機能は、それぞれの訳者の意図に応じて異なりうる。[A-TYPE]に属する翻訳には原文が付随していず、それ自体で独立して読まれることが前提されているので、テキストが完結していて、訳文だけで十分に理解できるような日本語文で

なくてはならない。他方、[B-TYPE] [C-TYPE] に属する解説・研究論文に引用される訳文は、それを説明するメタテキストに対して補助的な役割を演じるので、必ずしもそれ自体で理解できるものである必要はない、と推定することができる。[B-TYPE] も [A-TYPE] と同様に一般読者を対象にしているので、原文は挙げられていないのが普通である。ところが、[C-TYPE] には、原文も提示されている。この説明はむしろ逆で、原文に訳文が付随的に提示されていると理解すべきである。

ところで、*Die Bäume* は、独立した作品として短編集 *Betrachtung* に発表されたものであるが、もともとは *Beschreibung eines Kampfes* の一部として書かれていた。したがって後者には、前後の文脈が存する<sup>2)</sup>。この文脈内では、2人の対話の一部として描かれている。したがって、対話する人物が特定されうるので、それに応じたやりとりの表現として訳出されるなど、このコンテキストが翻訳に影響を与える可能性がある。

＊

以上の議論をまとめて、2つの仮説として提示しておく：

仮説①：翻訳の表現は、予想される対象読者の差に基づいて設定された3つのテキストタイプに依存して違ってくる。具体的には、[A-TYPE]，[B-TYPE]，[C-TYPE] の順に翻訳テキストの独立・完結度が低くなる。とくに [A-TYPE: 翻訳] に属する訳文は、他の2つのテキストタイプでは補助的な機能しかもたない訳文とは異なり、その日本語だけで十分理解可能である必要がある。したがって、そこでは内容や解釈の立場が明確に表現され、あいまいさが排除されている。

仮説②：*Beschreibung eines Kampfes* に埋め込まれている、*Die Bäume* のもとになったテキストは特定の人物どうしの対話というコンテキストによって制約を受けているので、その状況にふさわしい具体的な会話表現として訳出される。他方、*Die Bäume* のほうは、そのようなコンテキストが捨象されているので、必ずしも会話のように訳される必要はなく、かなり抽象的な訳文になる。

## 2. 日本語訳例

### 2.1. 訳文の整理

この作品の日本語訳は、同一訳者のものも含めて20例ある。本文に引用すると繁雑になるので、まとめて[資料編]として本稿末尾に掲げておいた。ここでは、その訳文を、上記 1.1. の枠組みにしたがい、1), 2), 3)の關係に焦点をあて、分類・整理を試みる。下線を施した箇所は、いずれの解釈を採用しているのかが明示的に現われている部分である。

<p>[翻訳タイプ]</p> <p>1) "Baumstämme im Schnee"</p> <p>2) " [...] liegen sie glatt auf"</p> <p>3) " [...] sie sind fest mit dem Boden verbunden"</p>	
[A-TYPE] 20例中4例	
I. 訳文から解釈の立場が判別できる例 : 2例 [50% (2/4)]	
立木 2例 [50% (2/4)]	倒木 0例
<p>[A-1] (高安 1953)</p> <p>1) 「雪中に<u>立つ</u>樹の幹」</p> <p>2) 「それはすべすと雪の上に載っている」</p> <p>3) 「固く大地に<u>根を張</u>っている」</p> <p>[A-4] (吉田 1992) :</p> <p>1) 「雪中に<u>立つ</u>木々の幹」</p> <p>2) 「それらの幹は、すると のっかっている」</p> <p>3) 「 [...] 幹は、しっかり 大地に結びついている」</p>	
II. 訳文から解釈の立場が判別できない例 : 2例 [50% (2/4)]	
<p>[A-2] (本野 1992(1963)) :</p> <p>1) 「雪に埋もれた樹々の幹」</p> <p>2) 「その幹は、たいらに雪の上にのせてある」</p> <p>3) 「幹は、しっかり大地にむすびついている」</p> <p>[A-3] (丸子 1980) :</p> <p>1) 「雪のなかの木の幹」</p> <p>2) 「それは滑らかに雪の上に載っている」</p> <p>3) 「木の幹は大地とかたく結びついている」</p>	
[B-TYPE] 20例中4例	
I. 訳文から解釈の立場が判別できる例 : 2例 [50% (2/4)]	
立木 1例 : 25% (1/4)	倒木 1例 : 25% (1/4)
<p>[B-3] (脇阪 1982) :</p> <p>1) 「雪の中の木の幹」</p> <p>2) 「すうりと<u>立</u>っていて」</p> <p>3) 「根は大地に<u>深く</u>のびている」</p>	<p>[B-1] (城山 1979) :</p> <p>1) 「雪の中の「<u>切り倒された</u>」樹木」</p> <p>2) 「平らかに<u>横たわ</u>っていて」</p> <p>3) 「木は地面としっかり結びついている」</p>
II. 訳文から解釈の立場が判別できない例 : 2例 [50% (2/4)]	
a) メタテキストによって立場が提示されている例	
「立木」かつ「倒木」(パラドクス)	
<p>[B-2] (三原 1982) :</p> <p>1) 「雪の中の木の幹 (Baumstämme)」</p> <p>2) 「それは [...] 滑らかに雪の上にのっている」</p> <p>3) 「木の幹はかたく大地とむすびついている」</p> <p>[B-4] (三原 1988) :</p> <p>1) 「雪のなかの木の幹」</p> <p>2) 「それは滑(すべ)らかに雪のうえにのっている」</p> <p>3) 「木の幹はかたく大地と結びついている」</p>	

[C-TYPE] 20 例中 12 例	
I. 訳文から解釈の立場が判別できる例: 5 例 [42% (5/12)]	
立木 3 例: 60% (3/5)	倒木 2 例: 40% (2/5)
[C-1] (植松 1960): 1) 「雪の中に <u>たっている樹木</u> 」 2) 「すんなりと <u>たてかけられて</u> ある」 3) 「 <u>樹木</u> はしっかりと地面に結びつ <u>け</u> られている」 [C-6] (梅津 1982): 1) 「雪の中に <u>立つ</u> 樹の幹」 2) 「それらは [...] <u>すべすべと雪の上</u> に載っており」 3) 「それはしっかりと大地に <u>根を張っ</u> ている」 [C-9] (柴田 1986): 1) 「雪の中に <u>立つ</u> 樹の幹」 2) 「それはなめらかに雪の上に載 <u>っ</u> ている」 3) 「 <u>固く大地に根を張</u> っている」	[C-3] (井上 1976): 1) 「雪の中の樹の幹」 2) 「それらは <u>すべすべと雪の上</u> に横た <u>わ</u> っている」 3) 「それらは <u>固く大地</u> に結びつ <u>い</u> ている」 [C-4] (城山 1976): 1) 「雪の中の樹の幹」 2) 「 <u>すべすべと雪の上</u> に横た <u>わ</u> っている」 3) 「 <u>固く大地</u> にくっついている」
II. 訳文から解釈の立場が判別できない例: 7 例 [58% (7/12)]	
II-a) メタテキストによって立場が提示されている例: 2 例 [29% (2/7)]	
「立木」と主張 2 例 [29%]	「倒木」と主張 0 例
[C-2] (林 1974): 1) 「雪の中の樹幹」 2) 「滑らかに <u>の</u> っかっている」 3) 「それは大地としっかりと結びつ <u>い</u> ている」 [C-8] (本橋 1983): 1) 「雪のなかの木の幹」 2) 「雪のうえになめらかに載 <u>っ</u> ている」 3) 「大地としっかりと結ばれている」	
II-b) 解釈の立場がどこにも提示されていない例: 5 例 [71% (5/7)]	
[C-5] (本野 1978): 1) 「雪に埋もれた樹々の幹」 2) 「その幹は <u>たいら</u> に雪面にのせてある」 3) 「幹はしっかりと大地に結びつ <u>い</u> ている」 [C-7] (小谷 1982): 1) 「雪の中の木の幹」 2) 「それは滑らかに載 <u>っ</u> かっている」 3) 「それはしっかりと大地と結びつ <u>い</u> ている」 [C-10] (古川 1989): 1) 「雪の中の木々」 2) 「それらは <u>平ら</u> に雪の上に載 <u>っ</u> ている」 3) 「それらは地面とかたく結びつ <u>い</u> ている」 [C-11] (斎藤 1991): 1) 「雪の中の木の幹」 2) 「それは滑らかに <u>の</u> っている」 3) 「木の幹は大地としっかりと結びつ <u>い</u> ている」 [C-12] (山田 1991): 1) 「雪の中の木の幹」 2) 「それは [...] 滑らかに雪の上に載 <u>っ</u> ており」 3) 「木の幹は大地とかたく結びつ <u>い</u> ている」	

## 2.2. 訳文と解釈

訳文から解釈の立場がはっきり読み取れるのは、[A-TYPE] 50%、[B-TYPE] 50%、[C-TYPE] 42%で、それぞれ約半数ずつである。[C-TYPE] で若干減少するが、有意な差とは言えない。したがって、仮説①で提出した、[A-TYPE] では明示的に特定の解釈が現われるという傾向は見いだせない。

ところで、この訳例を見てすぐ気づくことは、"Baumstämme im Schnee" の状態に関して「立木」と「倒木」の2様の解釈が訳文にある程度反映されるということである。「立木」という理解が訳文に明示されているのは20例中6例あり、他方「倒木」を示しているのは3例である。この両者の立場を合計すると9例なので、一つの解釈を明示している訳文は、全体の45%となる。残り11例は、両義的（あいまい）で、どちらの状態とも解釈できる。その中に含まれるパラドクスの解釈は、訳文に全く反映されていない。

「立木」という立場を明確に訳出する手段としては、「立つ」、「根を張っている」といった、原文にはない表現が意識的に用いられている。他方、「倒木」については、たとえば「[切り倒されて]」といった補足がなされたり、「横たわって」という表現が意識的にとられている。このように、どの立場の解釈に基づくかによって、あるテキストの同一表現の翻訳が異なってくる。そこで、さらに訳文を具体的に検討してみることにする。

### 2.2.1. "Baumstämme im Schnee" と "[...] liegen sie glatt auf"

"Baumstämme im Schnee"(= "sie") とそれを説明する "[...] liegen sie glatt auf" について、「立木」と「倒木」の2つの立場を比較してみよう。

まず、「立木」の立場についてである。「立木」という解釈を明示的に提示する訳文6例のうち、"Baumstämme im Schnee" の部分の訳文として「雪中に立つ樹の幹」、「雪の中に立つ樹の幹」などのように垂直方向を示唆する表現が使用されているものは5例あり、全体の82%を占める。ところが、"[...] liegen sie glatt auf" の部分が、たとえば「すらりと立っていて」のように垂直方向を指示する形で訳されている例は5例中2例で、全体の33%に過ぎない。

つぎに、「倒木」の立場であるが、「倒木」という解釈を明示的に提示する訳文3例のうち、"Baumstämme im Schnee" の部分の訳文として水平方向を示唆する表現を用いている例は、1例しかない(33%)。しかも、それは、[ ]を用いて説明的に補足されたものである。ところが、"[...] liegen sie glatt auf" を、たとえば「平らかに横たわっていて」というように垂直方向を指示する表現として訳出しているものは、3例中3例で、すべてである。

上述の両解釈の対照的な関係は、解釈の立場と、"aufliegen" という動詞の辞書的意味との対立によって生じたものと考えることができる。すなわち、その動詞の意味は、通常、水平方向を指示するので、「立木」という解釈を採用した場合、「立つ」といった垂

## 2.2. 訳文と解釈

訳文から解釈の立場がはっきり読み取れるのは、[A-TYPE] 50%、[B-TYPE] 50%、[C-TYPE] 42%で、それぞれ約半数ずつである。[C-TYPE]で若干減少するが、有意な差とは言えない。したがって、仮説①で提出した、[A-TYPE]では明示的に特定の解釈が現われるという傾向は見いだせない。

ところで、この訳例を見てすぐ気づくことは、"Baumstämme im Schnee"の状態に関して「立木」と「倒木」の2様の解釈が訳文にある程度反映されるということである。「立木」という理解が訳文に明示されているのは20例中6例あり、他方「倒木」を示しているのは3例である。この両者の立場を合計すると9例なので、一つの解釈を明示している訳文は、全体の45%となる。残り11例は、両義的(あいまい)で、どちらの状態とも解釈できる。その中に含まれるパラドクスの解釈は、訳文に全く反映されていない。

「立木」という立場を明確に訳出する手段としては、「立つ」、「根を張っている」といった、原文にはない表現が意識的に用いられている。他方、「倒木」については、たとえば「[切り倒されて]」といった補足がなされたり、「横たわって」という表現が意識的にとられている。このように、どの立場の解釈に基づくかによって、あるテキストの同一表現の翻訳が異なってくる。そこで、さらに訳文を具体的に検討してみることにする。

### 2.2.1. "Baumstämme im Schnee"と "[...] liegen sie glatt auf"

"Baumstämme im Schnee"(="sie")とそれを説明する "[...] liegen sie glatt auf"について、「立木」と「倒木」の2つの立場を比較してみよう。

まず、「立木」の立場についてである。「立木」という解釈を明示的に提示する訳文6例のうち、"Baumstämme im Schnee"の部分の訳文として「雪中に立つ樹の幹」、「雪の中に立つ樹の幹」などのように垂直方向を示唆する表現が使用されているものは5例あり、全体の82%を占める。ところが、"[...] liegen sie glatt auf"の部分が、たとえば「すらりと立っていて」のように垂直方向を指示する形で訳されている例は5例中2例で、全体の33%に過ぎない。

つぎに、「倒木」の立場であるが、「倒木」という解釈を明示的に提示する訳文3例のうち、"Baumstämme im Schnee"の部分の訳文として水平方向を示唆する表現を用いている例は、1例しかない(33%)。しかも、それは、[ ]を用いて説明的に補足されたものである。ところが、"[...] liegen sie glatt auf"を、たとえば「平らかに横たわっていて」というように垂直方向を指示する表現として訳出しているものは、3例中3例で、すべてである。

上述の両解釈の対照的な関係は、解釈の立場と、"aufliegen"という動詞の辞書的意味との対立によって生じたものと考えることができる。すなわち、その動詞の意味は、通常、水平方向を指示するので、「立木」という解釈を採用した場合、「立つ」といった垂



直方向を表わす表現とは馴染まないことになる。そこで、前もって "Baumstämme im Schnee" の箇所に垂直方向を含意するような表現をあてるという手段を選択したと推定される。ところが、「倒木」の解釈では、"aufliegen" の辞書的意味とまったく矛盾しないので、水平方向を指示する訳文が現われることになる<sup>42</sup>。したがって、解釈と訳語の選定にはある種の関連があることがわかる。

#### 2.2.2. "[...] sie sind fest mit dem Boden verbunden" と「根」

"sie"(= "Baumstämme im Schnee") を主語とする第2文 "[...] sie sind fest mit dem Boden verbunden" の部分の訳語に、「根を張っている」といった、具体的で明瞭な表現を用いているものは、「立木」という解釈をとっている6例のうち4例(66%)ある。ところが、「倒木」の立場では、具体的なイメージが喚起されるような訳をしているものは、皆無である。「倒木」の場合、通常地面と直接に結びついているはずはないので、"[...] sie sind fest mit dem Boden verbunden" の内容を具体的に提示することは困難だからであろう<sup>43</sup>。また、両義的(あいまい)に訳されている日本語においても、具体的なイメージを喚起させる訳文はまったく見られない。

\*

上述の2点から、解釈された "Baumstämme im Schnee" の様態と、テキストに含まれる表現の文字どおりの意味とがうまく馴染む場合は、必ずしもその辞書的意味に捕らわれない自由な(dynamisch)訳が行なわれるが、そうでない場合は、逐語的に訳されることが多いという傾向が見てとれる。

### 2.3. 不自然な訳語

訳語として不自然なものもある。たとえば、"glatt", "aber sieh" の部分にあたる日本語は、極めておかしいと言わざるをえないので、あえてここで取り上げておく。

#### 2.3.1. "glatt"

この "glatt" という副詞は、木の幹("Baumstämme")が雪面に対してどのような様態で存在しているのかを表現していると考えられる。つまり、直後の "auf(liegen)" を修飾することにより、"auf" という状況を強調しているに過ぎないと思われる。もしこの理解が正しいとすると、かなり理解困難な訳語も見られる。

解釈の4つの立場ごとに調べてみよう。[ ]内は、テキストタイプを表わす。

—「立木」(付随するメタテキストで立場が表明されているものも含める)8例:

「なめらかに」(「なめらかに」[C] 2例+「滑らかに」[C] 1例)」3例、

「すべすべと」[A] [C] 各1例、「するりと」[A] 「すらりと」[B] 「す

んなりと」[C] 各1例。

第1は、問題設定の不備である。つまり、訳文はそれが属するテキストタイプによって異なった現われ方をするという発想自体が誤りだという理由である。第2は、仮説①は適切であるが、対象として選択したテキスト類に誤りがあったと考える。つまり、「文学作品」というテキストではなく、実用文を対象にすれば、うまく仮説①が検証できたはずだと予測する。第3の理由は、ドイツ語を日本語に移すという作業を行なう訳者の意識に還元されるもの。つまり、自らの解釈を積極的に訳出しようとはしないで、「安全な」いわゆる逐語訳によって処理しようという傾向が強い訳者によって翻訳されたものを対象にしたという理由。第4は、第3と関連するが、訳文と解釈の立場とは直接に関係しているわけではないという理由である。したがって、訳文からどの解釈を採用しているのか判断し、分析することは不可能と考える。

このうち、どの説明が適切なのか、ここで評価することはできない。評価するためには、さらに異なるジャンルのテキストの翻訳を調査する必要がある。

### 3. *Beschreibung eines Kampfes* の日本語訳

テキストの前後関係を規定しうるコンテキストが解釈と翻訳に何らかの影響を与えうるとする仮説②をここで検討する。そのためには、埋め込まれた場合の作品、すなわち、*Beschreibung eines Kampfes* (Fassung A) の一部に認められる *Die Bäume* の原形となった部分の日本語訳を比較してみる<sup>23</sup>。

》 Wir sind nämlich so wie Baumstämme im Schnee. Sie liegen doch scheinbar nur glatt auf und man sollte sie mit kleinem Anstoß wegschieben können.  
Aber nein, das kann man nicht, denn sie sind fest mit dem Boden verbunden.  
Aber sieh, sogar das ist bloß scheinbar. 《

#### 3.1. 異同の確認

1.1. で提示した *Die Bäume* と比較し異同を確認してみる。歴史的には *Beschreibung eines Kampfes* が先に書かれているので、そこから *Die Bäume* として取り出される際に変更された点を指摘しておく。

第1文では、“nämlich” のかわりに、同様の機能を果たす “Denn” が文頭におかれ、“so wie” が “wie” だけになっている。第2文では、語順が異なる他、“doch”、“nur” という会話で頻繁に使用される表現が削除されている。第3文では、前文と同様に “aber” が削られている。第4文では、“bloß” が “nur” に置き換えられている。

基本的な文章構造には変化がなく、語彙・語順に若干の変更が加えられているに過ぎない。しかし、この語彙の変更により、会話文からより抽象度の高いテキストに変換されている、つまり、場面依存度が減少していることがわかる<sup>24</sup>。

### 3.2. 日本語訳例

訳例は3点しか手許にないので、本節に挙げておく。記号の使用法については、本稿末尾の〔資料編〕を参照のこと。

#### 3.2.1. [A-TYPE: 翻訳] : 2 例

##### [A-I] 《?》

「つまり、私たちは、雪のなかの木の幹みたいなものなんですよ。ちよつと見ると、まったく雪の上に載つかつてるだけのようですから、ほんの一押しで押しのけられそうですかね。だが、そいつが駄目なんです。そんなことができるもんですか。なぜつて、木は大地へしつかり結びついてんですからね。御覧なさい、見たところ、なんでもないようですね。」

(中井 正文訳：マックス・ブロート編集『カフカ全集』第3巻，新潮社，1971(1953)，S.294.)

##### [A-II] 《立木 (←「立っている」／「根を張っている」)》

「つまりですね、ぼくたちは、雪のなかに立っている木の幹のようなものなんですよ。見たところ、雪の上にただちょこんとのっかっているだけのようで、かるくひと突きしただけで動かせそうです。ところが、どっこい、そうはいきません。しつかり地面に根を張っているんですから。ところがですよ、それすらも、じつは見かけだけにすぎないんです」

(前田 敬作訳：『決定版カフカ全集2』，新潮社，1981，S.47.)

#### 3.2.2. [C-TYPE: 専門文献] : 1 例

##### [C] 《?→?》

《私達はつまり雪の中の木の幹のようなものです。それは外見上は滑らかに載っかっていて、ちょっと突いただけで、ずらして除けられそう。しかし、いや、そんなことは出来やしない。なぜつて、それはしつかりと大地と結び付いているのだから。しかし、見るがいい、それさえも単に外見上に過ぎないのだ。》

(小谷 哲夫訳：ペーター・バイケン：「解釈学上のこと — 解釈可能性とパラドックス的循環」．In: 『舟』第3号．1982，S.68.)

### 3.3. Die Bäume との比較 — 仮説②の評価 —

Beschreibung eines Kampfes の当該部分は、登場人物2人の行なっている会話の一部である。つまり、一方の人物が話したことが、直接話法で提示されている。そのため、

[C] の最後の4文を除いて、基本的に「です・ます」文体で表現されているほか、つぎのような表現も用いられていることに気づく：「～なんですよ」「～ですがね」「～てんですからね」「ところが、どっこい」など。したがって、対話というコンテキストが考慮され、独立した作品の *Die Bäume* に比べて、会話文らしく具体的な場面として生き生きと訳出されていることがわかる。コンテキストが与える影響が反映した訳になっていることが確認できた。したがって、仮説②は肯定されたと言ってよからう。

#### 4. 解釈・翻訳・翻訳文体論？

翻訳テキストの機能は、それが属するテキストタイプによって異なりうる。すると、訳文の評価は、それぞれのタイプごとに違うことになる。

[B-TYPE] のテキストには解説・議論というメタテキストが付随するので、そのテキスト内での訳文の比重は高くない。したがって、必ずしも日本語訳文だけで独立し、それだけで十分に解釈まで理解可能である必要はない。ところが、[A-TYPE] は、メタテキストが付随していないので、独立性がきわめて高い。したがって、「立木」か「倒木」のいずれか、場合によっては「あいまい(両義的)」も含めて、明確な解釈を提示し、それだけで十分理解可能である必要があろう。

[C-TYPE] に属する日本語訳についてだが、これは果して必要なのであろうか。この問題に関しては、2つの見解がありうる。1つは、同業者を対象としているので訳出する必要がないという立場。他の1つは、とくに紀要などの場合は、専攻が異なる者の目にもふれる可能性があるので、日本文は必要という立場である。もし後者の立場にたち、日本語訳を紀要などの専門文献に載せる必要があるとすれば、どのような方針で訳出するのが問題になる。自己の解釈を訳文から読み取れる程度に強調して訳出するのか、あるいは、便宜的な、いわゆる逐語訳にするのか。こういった問題についてもここでは十分な答えを引き出すことはできない。

\*

翻訳には、歴史的な影響関係が見てとれることがある。つまり、先行解釈や先行訳例による影響やいわゆる「師弟関係」による影響である。たとえば、"glatt" や "aber sieh" の訳語の不適切さ、あるいは類似の訳語の頻発は、先行訳例による制約といった観点を引き合いにださないと説明がつかないだろう。また、[資料編] の [C-3] と [C-4] とが同解釈であることの説明には、「師弟関係」もしくは "Schule" に基づく影響といった視点が必要になろう。このように、訳文を比較する研究には、通時的な視点も関わってくる。

#### 5. 結語

先行する小論(西嶋 1989; 1990)を書くにあたり、可能な限り多く内外の文献に目をとおした。その過程で収集された訳文が、ここで分析対象となったものである。この訳文

を何とか整理しようと考えたのが、本稿の出発点であった。しかし、翻訳とい問題は、あまりに広く、多岐にわたるので、一般的な形で議論することが困難な領域である。カフカの作品 *Die Bäume* というテキストの訳文の分析を通じて、1つの可能な翻訳比較研究の方向が示唆でき、日本のドイツ文学研究の一部においてまかりとおっている訳文の奇妙さを指摘できたとすれば、本稿の目的はとりあえず達成できたと考えていい。

## 6. 注釈

1) Franz Kafka: *Sämtliche Erzählungen*. Hrsg. von Paul Raabe, Frankfurt/M:

Fischer Taschenbuch Verlag, 1975, (1970), S.19. なお、後でもふれることになるが、*Die Bäume* は *Beschreibung eines Kampfes* の一部から採取されたものである。

この部分の引用も、同書に基づく。

2) 本稿では、解釈については議論することはしない。さまざまな解釈の検討については、西嶋(1989; 1990)を参照のこと。ところで、英語訳とフランス語訳の場合はどうであろうか。ここで調べておくことにする。

英語訳 *The Trees*

For we are like tree trunks in the snow. In appearance they lie sleekly and a little push should be enough to set them rolling. No, it can't be done, for they are firmly wedded to the ground. But see, even that is only appearance.

(Translated by Willa and Edwin Muir: Nahum N. Glatzer(ed.): *The Collected Short Stories of Franz Kafka*. Harmondsworth: Penguin Books, 1988(1983), S.382. (= Franz Kafka: *The Penal Colony*. Stories and short pieces. New York: Schocken Books, 1976, S.39-40. Translated by Willa and Edwin Muir.)

英訳 *The Trees* では、"lie", "to set them rolling" という表現の "rolling" から明らかなように、「倒木」の立場をとり、それを明確に表現していることがわかる。では、*Beschreibung eines Kampfes* の英語訳 *Description of Struggle* の一部の該当箇所はどうであろうか。

"For we are like tree trunks in the snow. They lie there apparently flat on the ground and it looks as though one could push them away with a slight kick. But no, one can't, for they are firmly stuck to the ground. So you see even this is only apparent."

(Translated by Tania and James Stern: *Description of a Struggle*. In: Nahum M. Glatzer(ed.): *The Collected Short Stories of Franz Kafka*. Harmondsworth: Penguin Books, 1988(1983), S.45. (= Franz Kafka: *Description of a Struggle*. New York: Schocken Books, 1958, S.83-84.)

"lie" という表現から推測する限り、「倒木」の解釈をとっているようである。

つぎに、フランス語訳を見てみよう。残念ながら *Die Bäume* の翻訳が手許にないので、*Beschreibung eines Kampfes* (Fassung A) の仏訳 *Description d'un combat* の一部と比較してみる。

《Nous sommes pareils, en effet, à des troncs d'arbres dans la neige. On dirait qu'ils sont simplement posés, d'une chiquenaude on devrait pouvoir les pousser. Non, ce n'est pas possible, car ils sont solidement attachés au sol. Mais regarde bien: même cela n'est qu'une apparence.》

(Kafka: Oeuvres complètes II. Recits et fragments narratifs. Tra. par Claude David, Marthe Robert et Alexandre Vialatte, Bibliothèque de la Pléiade, Paris, Gallimard, 1980, S.40.)

"... qu'ils sont simplement posés" という表現から、どちらともとれることがわかる。辞書によれば、"posés" < "poser" = "(hin)setzen, (hin)legen, (hin)stellen" といったように、必ずしも一定の方向性と関係のない動詞としてに説明されているからである (vgl. *Sachs-Villatte Französisch-Deutsch*. Berlin-Schöneberg: Langenscheidt, 1963, S.709)。

3) *Beschreibung eines Kampfes*. 上掲書 (P.Raabe(hrsg.)) S.227 を参照のこと。

なお、これには、A 稿と B 稿とがある。Franz Kafka: *Beschreibung eines Kampfes*. Die zwei Fassungen. Parallelausgabe nach den Handschriften. Herausgegeben und mit einem Nachwort versehen von Max Brod. Textedition von Ludwig Dietz. Frankfurt/M: S.Fischer Verlag, 1969)

2つの草稿の内容はつぎのとおり：

FASSUNG A:

》Wir sind nämlich so wie Baumstämme im Schnee. Sie liegen doch scheinbar nur glatt / auf und man sollte sie mit kleinem Anstoß wegschieben können. Aber nein, das kann man nicht, denn sie sind fest mit dem Boden verbunden. Aber sieh, sogar das ist bloß scheinbar. 《(S.122)

FASSUNG B:

》Weisst Du denn schon, dass wir so sind, wie Baumstämme im Schnee? Die liegen doch scheinbar nur glatt auf und man sollte sie mit kleinem Anstoss wegschieben können. Aber nein, das kann man nicht, denn sie sind fest mit dem Boden verbunden. Schon gut, aber selbst das ist bloss scheinbar... 《(S.123)

4) "aufliegen" の垂直方向の意味の可能性については、西嶋 (1990) を参照のこと。

5) 西嶋 (1989) では、氷結という解釈が提出されている。

6) 場面依存度については、西嶋 (1990) を参照。

## 7. 参考文献

- 西嶋 義憲(1989): 「カフカの *Die Bäume* の構造分析の試み - テクスト言語学の視点から -」. In: 『広島ドイツ文学』第4号, 1989, S.29-48.
- ——— (1990): 「カフカのテクスト *Die Bäume* を理解するために - テクストの多層性について -」. In: 『かいろす』第28号, 1990, S.31-44.
- Sandig, Barbara(1978): *Stilistik*. Berlin/New York: de Gruyter, 1978.

### Interpretation - Übersetzung - Übersetzungsstilistik?

#### - Am Beispiel von Kafkas Text "*Die Bäume*" -

Yoshinori NISHIJIMA

Kafkas Stück "*Die Bäume*" wird in japanischer Sekundärliteratur der verschiedenen Texttypen, wie z.B. wissenschaftlichen Arbeiten und populärwissenschaftlichen Texten, zitiert und dabei oft ins Japanische übersetzt. Es gibt 20 Übersetzungen von diesem Stück, soweit ich bisher gesehen habe.

Das Ziel der vorliegenden Arbeit liegt darin, erstens in texttypologischer Hinsicht die Übersetzungen miteinander zu vergleichen. Dabei wollen wir auch feststellen, ob und inwieweit sich die bisher in der Sekundärliteratur vorgeschlagenen 3 Lesarten des Stücks (besonders bezüglich der Lage der "Baumstämme im Schnee") in den Übersetzungsausdrücken spiegeln können. Darüber hinaus werden die Übersetzungen auch mit denen des entsprechenden Teils aus "*Beschreibung eines Kampfes*", von dem der Text "*Die Bäume*" entnommen wurde, verglichen, um Einflüsse des Kontextes auf die Übersetzung zu prüfen.

Als Ergebnis der Arbeit kann festgestellt werden, daß sich die verschiedenen Lesarten z.T. in den Übersetzungen spiegeln. Aber abhängig von den Texttypen der Übersetzungen änderten sich die Übersetzungsausdrücke nicht.

〔資料編〕

ここでは、日本語訳を翻訳タイプ別・発表年代順に列挙していくわけだが、まず、記号使用法についての取り決めをしておこう。

《 》内は、翻訳された日本語文章だけから判断できる範囲内での "Baumstämme im Schnee" の状態を示している。たとえば「立木」と「倒木」は、それぞれ、立っている状態と倒れた状態を表わす。「？」は、訳文上から、どの立場の解釈にたっているのかが判断できないことを表わす。

「(←)」の「←」後に示されるのは、判断基準となった明示的な日本語訳文である。

〔C-TYPE〕の研究論文などについては、訳文から判断できない場合、論文中でどのような解釈に基づいて議論がなされているのかを、「→」の後に示しておいた。「→」の後の「？」は、論文中においても "Baumstämme" の状態が直接議論されていず、解釈の立場が不明であることを表わす。

〔A-TYPE: 翻訳〕：4例

〔A-1〕樹木《立木(←「立つ」／「根を張っている」)》

だって私たちは雪中に立つ樹の幹なのだ。見たところそれはすべすべと雪の上に載っている。ちよつと押せば簡単に押しのけられそうに見える。ところが、そうは行かない。固く大地に根を張っているのだから。だが見よ、それさえも見かけに過ぎないのだ。(原文は旧字体)

(高安 國世訳：マックス・ブロー特編集『カフカ全集』第3巻，新潮社，1953，S.35.)

〔A-2〕樹《？》

つまりわたしたちは、雪に埋もれた樹々の幹に似ている。その幹は、たいらに雪の上ののせてあるように見え、かるく突いてすべらせることができそうである。ところが、幹は、しっかり大地にむすびついているのだから、それはできない。しかしまた、このことですら、じつは見かけ倒しにすぎないのである。

(本野 享一訳：フランツ・カフカ『ある流刑地の話』，角川書店(角川文庫 2251)，1992(1963)，S.48.)

〔A-3〕木々《？》

なぜならば私たちは雪のなかの木の幹のようなのだから。それは滑らかに雪の上に載っているように見える、ほんの一突きで押しのけることもできるだろう。いや、そうはいかない、木の幹は大地とたたかき結びついているのだから。しかし、見たまえ、それすらもそう見えるというにすぎない。

(丸子 修平訳：『決定版カフカ全集1』，新潮社，1980，S.29-30.)

〔A-4〕木々《立木(←「立つ」)》

だってわたしたちは 雪中に立つ木々の幹のようなもんだから。一見それらの幹は、すわりと のっかっているように見える。だからちよつと突いてやれば、押しのけられそうに思える。だが だめだ、そうはいかない。だって幹は、しっかり 大地に結びついているんだから。ところがどうだ、それさえ 見かけにすぎない。

(吉田 仙太郎訳：『カフカ 観察』，高科書店，1992，S.82-3.)

\*

〔B-TYPE: 非専門文献〕：4例

〔B-0〕樹木《立木(←「立つ」)》

だって私たちは雪中に立つ樹なのだ。見たところそれはすべすべと雪の上に載っている。ちよつと押せば簡単におしつけ(ママ)られそうに見える。ところが、そうは行かない。固く大地に根を張っているのだから。だが見よ、それさえも見かけに過ぎないのだ。(原文は、旧字体。なお、明らかに〔A-1〕を下敷にしていると思われるので、以下では考慮しないことにする)

(小島 信夫：「消滅の文学 ―カフカにおける抽象性について」，In: 『文藝』2月号，1957，S.83。(= 辻 星編：『カフカの世界』，荒地出版社，1971，S.122))

〔B-1〕「樹木」《倒木(←「切り倒された」／横たわっていて)》

人間は雪の中の〔切り倒された〕樹木に似ている。見かけは平らかに横たわっていて、ちよつと押せば押しのけられそう。いや、それはだめだ、木は地面としっかり結びついている。しかしごらん、それさえただ見かけにすぎない。

(城山 良彦：「ドイツにおけるカフカ研究の現在」，In: 『ユリイカ 詩と批評』vol.2，



[B-2] 木々《?→「立木」でかつ「倒木」というパラドクスと主張》

なぜならぼくらは雪の中の木の幹 (Baumstämme) のようなものに似ている。それは一見すると滑らかに雪の上ののっているようだ。ちょっと一突きすればずらしてのけることができそうだ。ところがそうはいかない。木の幹はかたく大地とむすびついているのだから。しかし見たまえ、そのことですら、そうみえるというにすぎないのだ。

(三原 弟平訳, 池田/好村/小岸/野村/三原:『カフカの解説』, 寝々堂, 1982, S.212.)

[B-3] 表題なし《立木 (←「立っている」/「根は大地に深くのびている」)》

そう、ぼくたちは雪のなかの樹の幹なのだ。みたところすらりと立っていて、ほんのひと突きで押しのけられそう。いやそうはいくまい。なぜって。根は大地に深くのびているのだもの。でも見たまえ、それだってただの見せかけのことなんだ。

(脇阪 豊:「続・盛岡から」. In:『匙』No.6, 1982, S.39-40.)

[B-4] 樹々《?→「立木」でかつ「倒木」というパラドクスと主張》 (= [B-2])

だって、ぼくらは雪のなかの木の幹のようだから。それは滑 (すべ) らかに雪のうえののっているようだ。ちょっと一突きすれば、ずらしてのけることができそうだ。ところがそうはいかない。木の幹はかたく大地と結びついているのだから。しかし、見たまえ、そのことすら、そう見えるというにすぎない。

(三原 弟平:「スライドするパラドクス -カフカにおけるイメージの変遷と現実-」. In:『講座・20世紀の芸術5 言語の冒険』, 岩波書店, 1988, S.96-97.)

\*

[C-TYPE: 専門文献]: 12例

[C-1] 表題なし《立木 (←「たっている」)》

だって我々は雪の中にたっている樹木の様なものなのだ。見たところすなりとたてかけられてある様で、ちょっと一押すれば、おしのけるこも出来そう。否そんなことは出来ない。樹木はしっかりと地面に結びつけられているのだから。しかし見よ、それさえも見せかけにすぎないのだ。

(植松 健郎:「カフカの短編への一考察」. In:『大阪工業大学紀要 人文篇』第4巻第1号, 1960, S.41.)

[C-2] 樹木《?→「立木」と主張》

というのも我々は雪の中の樹幹のようなものだ。みたところそれは滑らかにのっかっていて、軽く一突きしてやればずらせそう。どっこい、そういうわけにはいかない、というのもそれは大地としっかりと結びついているのだからだ。しかしごらん、それさえみせかけにすぎぬ。

(林 捷:「カフカ:『観察』『ある闘いの記録』論 -あるいは陸の船酔い-」. In:『福井大学教育学部紀要 第I部人文科学外国語・外国文学編』第24号, 1974, S.125.)

[C-3] 樹木《倒木 (←「横たわっている」)》

というのも、私たちは、雪の中の樹の幹のようなものだ。/ 見たところそれらはすべすと雪の上に横たわっていて、ちょっと押せば簡単に押しのけられそうに見える。/ ところがそうはいかない、それらは固く大地に結びついているのだから。/ だが見よ、それさえも見かけたに (ママ) すぎないのだ。/

(井上 正篤:「フランツ・カフカの小品集『観察』について」. In:『東京工業大学人文論叢』No.2, 1976, S.108.)

[C-4] 樹木《倒木 (←「横たわっている」/「固く大地にくっついている」)》

だってぼくらは雪のなかの樹の幹のようなものだ。見かけではすべすと雪の上に横たわっていて、ちょっと押せば押しのけられそう。いや、そうはいかない、固く大地にくっついている。しかし見よ、それさえ見かけにすぎないのだ。

(城山 良彦:「『ある戦いの記録』について (二)」. In:『井上正蔵教授記念論文集』 (=『東京都立大学人文学報』116号), 1976, 109-123, S.110.)

[C-5] 樹《?→?》

つまりぼくたちは雪に埋もれた樹々の幹に似ている。その幹はたいらに雪面にのせてあるように見え、かるくつついてもすべらせることが出来そうである。ところが、幹はしっかり大地に結びついているのだから、それは出来ない。しかしまた、このことですらじつ

は見せかけにすぎないのである。

(本野 享一：「カフカの『不安定な』闘いについて」．In:『ヨーロッパ文学研究』(甲南女子大学)第2号, 1978, S.90. ただし, 初出雑誌 Hyperion からの翻訳)

[C-6] 樹木《立木(←「立つ」／「根を張っている」)》

というのも私たちは雪の中に立つ樹の幹のようなものなのだ。それらは一見すべすべと雪の上に載っており、ちょっと押せば簡単に動かさそう。しかしそうはいかない。それはしっかりと大地に根を張っているのだから。だが見よ、それさえも見せかけにすぎないのだ。

(梅津 真：「Steinmetz の Suspensive Interpretation - der paradoxe Zirkel をめぐって-」．In:『独語独文学科研究年報』(北海道大学文学部)第9号, 1982, S.61.)

[C-7] 樹木《?→?》

なぜならば私達は雪の中の木の幹のようなものだから。外見上はそれは滑らかに載っかっていて、ちょっと突けば、ずらして除けられそう。そんなことは出来やしない。なぜって、それはしっかりと大地と結びついているのだから。しかし、見るがいい、それさえもただの外見上に過ぎないのだ。

(小谷 哲夫訳：ペーター・バイケン：「解釈学上のこと - 解釈可能性とパラドックスの循環」．In:『舟』第3号, 1982, S.69.)

[C-8] 樹木《?→「立木」と主張》

だってぼくたちは雪のなかの木の幹みたいだからさ。みたところ それは雪のうえになめらかに載っている。ほんの一突きで 押しのけられそう。いや そんなことはできない。だって 大地としっかりと結ばれているから。だが ごらんよ、 それだってそうみえるだけのさ。

(本橋 右京：「カフカ試論 I - 『樹木』を形成する視点-」．In:『独文論集』(都立大学大学院)第2号, 1983, S.83.)

[C-9] 木々《立木(←「立つ」／「根を張っている」)》

なぜって私たちは雪の中に立つ樹の幹のようなものだ。見たところそれはなめらかに雪の上に載っている、ちょっと一突きで簡単に押しのけられそうに見える。ところがどっこいそれは間屋がおろさない。なぜって固く大地に根を張っているのだから。だが見よ、それさえも単に見かけに過ぎないのだ。

(柴田 庄一：「フランツ・カフカの文学世界(1) - <書くこと>の意味するもの-」．In: 日本独文学会東海支部『ドイツ文学研究』第18号, 1986, S.61.)

[C-10] 木々《?→?》

というのも、私たちは雪の中の木々のようなものなのだ。見たところ、それらは平らに雪の上に乗っていて、ちょっと押せば押しのけることができるだろう。いや、そんなことはできない。というのも、それらは地面とかたく結びついているからだ。しかし見よ、それさえも見せかけにすぎないのだ。

(古川 昌文：「ある敗北の記録 - カフカ作品の一つの深層構造-」．広島大学大学院修士論文, 1989, S.13.)

[C-11] 木々《?→?》

というのも、僕たちは雪の中の木の幹のようなものなのだから。それは滑らかにのっているようにみえる、ちょっと突いてやれば、ずらしてやることもできるだろう。いや、それはできない、というのも、木の幹は大地としっかりと結びついているのだから。しかし見たまえ、それすら、そう見えるというにすぎない。

(斎藤 昌人：「閉ざされる世界」．In: 京都大学大学院独文研究室『研究報告』5号, 1991, 89-119, S.106.)

[C-12] 木々《?→?》

なぜならばぼくたちは雪の中の木の幹のようなものなのだから。それは見かけの上では滑らかに雪の上に載っており、ほんの一突で押しのけることもできそう。いや、そうはいかない、木の幹は大地とかたく結びついているのだから。しかし、見たまえ、それすらも見かけの上にはすぎない。

(山田 積：「カフカにおけるパースペクティヴの転換と<通路>のトポス」．In:『熊本大学教養部紀要 外国語・外国文学編』第26号, 1991, S.108.)